A-7

新聞における日・韓外来語の使用傾向

林　廷修

1. 研究背景

人間の言語は一定不変でなく、様々な原因により絶えず変化する特徴を持っている。例えば、すでに存在していた語が使われなくなったり(いわゆる死語)、すでに存在する語の形を一部変えたりもする。また、これとは逆に全く新しい言葉を受け入れたりもする。すなわち、人間の言語は生産性(productivity)を持つと言える。特に、最近各国に新しく入ってくる言葉は西洋由来のものがその大半を占めている。日本と韓国における西洋由来の外来語はそのほとんどが名詞として借用され、そこに接辞を付けて動詞化したり形容動詞(形容詞)化したりすることは周知のことである。つまり、いずれの言語も借用した外来語をより生産的にする独自のシステムを持っているということである。このことから、本研究では日本語と韓国語における外来語を考察対象とし、新聞における実際の使用傾向及び品詞の派生関係から両言語の生産性について考察する。

2. 先行研究

ここでは最初に、外来語の定義に関する先行研究を概観し、次に新聞を基にした外来語調査及び外来語の品詞に関する先行研究について述べる。

外来語の定義に関しては、狭義の外来語と広義の外来語とに分けてみる立場があり(石綿 2001、金 2012 など)、各学者によりまちまちである。我々の言語生活の中に深く浸透している漢語は、中国由来の語である点でいわゆる広義の外来語ではあるが、別扱いすることが一般的であるとされている(沖森編 2011)。

次に、新聞をもとに外来語の使用傾向を調査したものには、田中(2006)がある。田中(2006)は『毎日新聞(2003)』朝夕刊の各面を考察対象とし、それにおける外来語の割合を公共性の高い白書と広報紙とで比較している。全体的には3.9%(延べ語数)の割合で外来語が使われており、記事の分野別には「スポーツ(5.3%)」「芸能(4.4%)」「経済(4.2%)」「科学(4.2%)」「家庭(3.7%)」の順に高いとされている。一方、임(2002)によれば、韓国の新聞においては2.7%(延べ語数)のみが外来語として使われており、混種語(10.3%)よりも低い割合を占めていることが指摘されている。

最後に、外来語の品詞について述べているものには、国立国語研究所編(2006)がある。それによると、日本語は単語そのものは語形変化せず、単語に助詞や接辞などを直接張り付けることで文法的機能を表すとされている。そのため、単語の意味は分からなくても単語の後ろに「する」が接続していれば動詞、「な」が接続していれば形容動詞であることが分かり、このような性質は外来語のみならず新語の受け入れにおいても大きな効力を発揮すると述べている。また、北澤(2012)では外来語を動詞化するときは「する」を付けてサ変動詞にすることが典型的であり、状態性の意味を表す品詞を作るときは「だ/な」を付けて形容動詞化することが典型的で、それ以外は周辺的であるとしている。なお、韓国語の場合、名詞はそのままの形で受容するが、動詞または形容詞の場合には日本語の「する」に相当する「하다」を付けるとしている(김1998、노2012)。

以上、先行研究を簡単に概観したが、新聞というジャンルにおける外来語の品詞に関してはあまり研究が進められていないように思われる。また、日韓両言語とも名詞に「する」「하다」を付けた形で外来語を受け入れるというが、実際にどの程度の割合で使われているかということも調べられていない。そこで本研究では、日本語と韓国語における外来語を考察対象とし、新聞における実際の使用傾向及び品詞の派生関係から両言語の生産性を考察する。

3. 分析方法

1) 考察対象の選定

本研究では、多くの研究で扱われている通り、漢語以外の借用語を外来語(混種語も含む)と定義する。両言語において既に定着した外来語を抽出するため、日韓で出版されている日本『明鏡国語辞典(2001)』(以下、明鏡)と韓国『연세한국어사전(延世韓国語辞典)(1998)』(以下、연세)を用いることとした。全体の収録語彙数は『明鏡(2001)』が約7万語(71,515語)、『연세(1998)』が約5万語(53,354語)で両者の間に差はあるが、その差が一番小さかったものはこれらの小型国語辞書であった。

外来語の割合は『明鏡(2001)』が9.3%(6,683語)、『연세(1998)』が3.0%(1,584語)であった。また、同じ外来語において二つまたは三つの品詞に派生する外来語の生産性をより詳しく見るため、両言語に共通する外来語を抽出した。その数は日本語が1,303語、韓国語が1,301語で異なっているが、これは日本語表記の揺れにより1対1に不一致する場合もあるからである。また、日本語の辞書では、1つの意味を持つ複数の外来語がある場合(主に表記の揺れによるもの)には、1つの見出し語として収録されている。新聞における使用傾向を調べるため、それを別々に区分してカウントすると1,392語になる。

2) 新聞データの選定

データとしては、日本の『毎日新聞(CD-ROM)』と韓国の『동아일보(東亜日報)』を用いる(両方とも共に2001-2003年、全紙面)。ここで新聞コーパスを使うのは、新聞マスコミは大衆への波及力が大きい点で、規範的な日本語や韓国語を使うようにしているためである。しかし、両データの規模が大幅に違う問題があるため、同等な規模での比較を行うためにランダムサンプリングを行った。また、サンプリングしたデータからの分析が一貫性のある結果を表せるかを確認するため、50回のランダムサンプリングを行った。その結果、その出現率に大きな差はなかった。このことから、ランダムサンプリングが全体標本を代表できると判断し、1回のランダムサンプリングからの結果に基づいて考察を行った。さらに、各年のデータ量も完全には一致しないため、生の出現頻度で比較せず、下記のように100万字当たりの出現率に換算した。

$$\text{出現率} = \frac{\text{出現頻度}}{\text{総文字数}} \times 1{,}000{,}000$$

3) 分析手順

まず、辞書で抽出した日韓共通の外来語をベースとし、それらを新聞コーパスで検索した。次に、新聞から抽出した例文の外来語を、形態素解析を通して品詞判断した。形態素解析にはMecab(日本語)とMecab-ko(韓国語)を使用し、辞書としてはmecab-ipadic-NEologd3を使用した。これを使用した理由は、月に2回程度更新されるため、外来語の複合名詞、新語、固有表現への対応が期待できるためである。外来語を含む例文に対する形態素解析の結果から、外来語とその後ろに出現する形態素の品詞に基づき、各例文における外来語の品詞を判断した。ただし、検索結果と辞書の見出し語の意味とが異なる場合は考察対象から除外した。

4. 分析結果

4.1 外来語の全体的な使用傾向

日韓新聞における外来語の全体的な使用傾向を見ると、両言語に共通する外来語(日本語 1,392語、韓国語 1,301 語)のうち新聞で実際に使われているのは、日本語が 76.1%(1,059 語)、韓国語が 74.0%(963 語)であり、日本語のほうが韓国語より若干多い割合で使われているが大きな差は見られなかった。表 1 は両言語における 100 万字当たりの出現頻度を表している。日本語が 6,116

件、韓国語が 6,288 件で韓国語が少し高いものの、この場合も両者に大きな違いは見られなかった。

表1　日韓外来語の100万字当たりの出現頻度

言語	全体文字数	外来語出現総数	出現頻度
日本語	6,189,027	37,854	6,116
韓国語	6,191,006	38,928	6,288

次の表2は、日韓新聞において出現頻度の高い上位30の外来語をまとめたものである。全体的にみて上位の外来語の中でも約半分に近いものが日韓両言語とも同じ外来語であることが分かる。表の灰色にしてある部分がそれらであり、具体的には「チーム」「インターネット」「テロ」などが挙げられる。特に、日本語についてみると「メートル」「キロ」「ドル」「ポイント」「センチ」など、いわゆる助数詞に含まれるものが多く表れている。しかし、韓国語では「달러(ドル)」「포인트(ポイント)」以外の助数詞は上位に表れていない点で特徴的である。その代わりに、「홈런(ホームラン)」「골(ゴール)」「골프(ゴルフ)」「시즌(シーズン)」のようなスポーツ関連の外来語が日本語に比べて比較的多い様子がうかがえる。

表 2　日韓新聞における上位外来語 30

順位	日本語	総計	韓国語	総計
1	メートル	1213	팀(チーム)	1642
2	キロ	1048	인터넷(インターネット)	1326
3	チーム	807	달러(ドル)	1294
4	テロ	707	아파트(マンション)	992
5	ドル	551	프로(プロ)	753
6	ポイント	539	그룹(グループ)	735
7	テレビ	535	게임(ゲーム)	678
8	グループ	498	카드(カード)	632
9	センチ	480	서비스(サービス)	602
10	センター	426	시즌(シーズン)	572
11	システム	404	유럽(ヨーロッパ)	522
12	リーグ	392	시스템(システム)	495
13	トップ	389	리그(リーグ)	467
14	ホテル	348	프로그램(プログラム)	446
15	サービス	325	올림픽(オリンピック)	422
16	スタート	321	센터(センター)	421
17	テーマ	317	브랜드(ブランド)	416
18	メンバー	308	컴퓨터(コンピューター)	415
19	ケース	307	디지털(デジタル)	405
20	メディア	276	테러(テロ)	368
21	ファン	264	호텔(ホテル)	365
22	インターネット	256	홈런(ホームラン)	362
23	データ	244	모델(モデル)	356
24	ビル	243	이미지(イメージ)	351
25	トン	239	골(ゴール)	340
26	クラブ	234	골프(ゴルフ)	330
27	ミス	225	포인트(ポイント)	326
28	スポーツ	225	스포츠(スポーツ)	306
29	メール	218	유엔(UN)	294
30	プロ	215	디자인(デザイン)	267
合計		12,554 (33.2%)		16,900 (43.3%)

また、上位30の外来語が全体出現頻度の中で占める割合を見ると、日本語が33.2%、韓国語が43.3%である。ここから両言語における外来語の使用傾向が異なると考えられ、全体外来語における使用頻度の分布を比較した。図１は、日韓外来語の全体出現頻度を100とした場合、出現頻度の高いものから低いものまでの累積出現頻度を示したものである。両言語を比較すると、全体出現頻度にはあまり差がないものの、日本語が韓国語に比べ、多様な外来語が幅広く使われていると解釈できる。それに対し、韓国語は出現頻度に偏りがあることが分かる。このことから、同じ外来語でも日本語が韓国語よりも幅広い範囲で多く用いられる点で生産性が高いと言える。

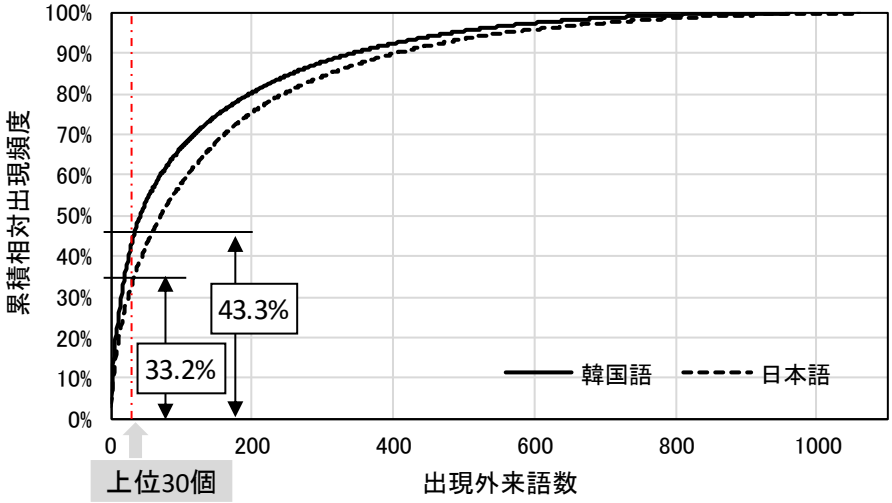

図1 日韓外来語の累積相対出現頻度

4.2 新聞における外来語の品詞

派生の観点から両言語の生産性を比較するため、各外来語がどのような品詞として使われているのかを調べる。表3、表4は、日韓それぞれの新聞における外来語の品詞分布を表している。日本語と韓国語の共通点としては、まず、両言語とも「名詞」単独のものが圧倒的に多く、「動詞」「形容動詞(形容詞)」の順で多いことが確認できる。次に、二つの用法を併せ持つもの(二重)としては「名・動」が一番多く、その次が「名・形動」である。さらに、三つの用法を併せ持つもの(三重)には「名・形動・副」と「名・動・副」がある。前者に属する日本語には「ドラマチック」「スマート」「ユーモラス」「カジュアル」「コンパクト」があり、韓国語には「프로(プロ)」「클래식(クラシック)」「오버(オーバー)」「로맨틱(ロマンチック)」「캐주얼(カジュアル)」「코믹(コミック)」がある。これらの結果から、やはり「名詞」の使用頻度が最も高く、そこから「動詞」や「形容動詞(形容詞)」などに派生していることが分かる。

表3　日本新聞における日韓共通外来語の品詞分布

品詞	単独	名詞	動詞	形容動詞	形容詞	副詞	感動詞	単独＋二重	三重	合計
名詞	950							1,048	6	1,054(90.2%)
動詞	2	86						88	1	89(8.4%)
形容動詞	3	11	0					14	5	19(1.8%)
形容詞	0	0	0	0				0		0(0.0%)
副詞	0	1	0	0	0			1	6	7(0.7%)
感動詞	0	0	0	0	0	0		0		0(0.0%)
合計	955	98	0	0	0	0	0	1,151	18	1,169(100%)

表4　韓国新聞における日韓共通外来語の品詞分布

品詞	単独	名詞	動詞	形容詞	副詞	感動詞	単独＋二重	三重	合計
名詞	876						952	6	958(91.1%)
動詞	2	63					66	6	72(6.8%)
形容詞	2	12	1				15	6	21(2.0%)
副詞	0	0	0	0			0		0(0.0%)
感動詞	0	1	0	0	0		1		1(0.1%)
合計	880	76	1	0	0	0	1,034	18	1,052(100%)

日本語と韓国語の品詞における相違点としては、日本語の方が韓国語に比べ、動詞への派生が多いことが挙げられる。名詞から動詞に派生した外来語を見ると、日本語は87語、韓国語は69語が現れた。その中で、出現頻度10以上の場合（日本語71語、韓国語62語）に限り、名詞から動詞派生への割合を図2に示した。30%以上動詞として用いられる割合を見ると、日本語は23.9%である一方、韓国語は11.3%である。つまり、日本語が韓国語より相対的に多く派生できる点で比較的生産性が高いと考えられる。

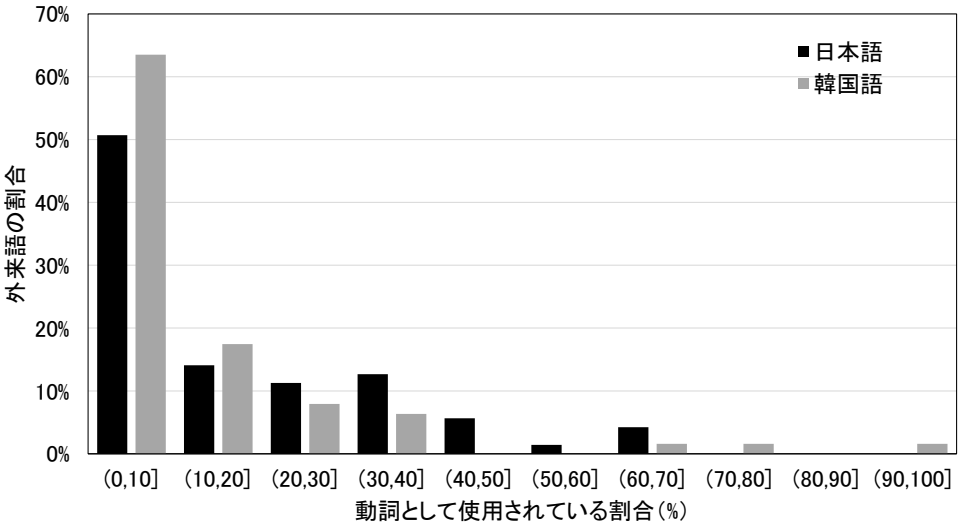

図2 外来語における名詞から動詞派生への割合

最後に、表5は新聞における日韓共通外来語の品詞分布と国語辞書における日韓共通外来語の品詞分布を比較したものである。この表5を提示した理由は、両言語に定着した外来語の品詞が、新聞において活用される特徴を把握するためである。この結果を見ると、両言語共に名詞、動詞の割合が高い点が見られる。一方、形容動詞、形容詞は両者に違いが見られた。韓国語の辞書では、形容詞の割合(1.1%)が日本語の形容動詞の割合(2.4%)に比べて低いが、新聞では逆に高い値(2.0%)を表していることが読み取れる。つまり、新聞では韓国語が日本語に比べ、形容動詞として用いられている例が比較的多いということである。その理由は、韓国語で形容詞を作るのは基本的に「하다(する)」であるが、新聞ではそれ以外にも「답다(らしい)」を結合した形で使用しているためであると考えられる。「답다(らしい)」を結合することで、ある状態や性質を表すからである。例としては、「프로(プロ)」「그룹(グループ)」「아마추어(アマチュア)」などが挙げられる。以上のことから、日本語では外来語を動詞として活用することが相対的に多く、韓国語では名詞を形容詞化して使用する傾向があるという結論を見出すことができる。

表5 国語辞書と新聞における日韓共通外来語の品詞分布

区分	日本語				韓国語			
	延べ語数		割合		延べ語数		割合	
	国語辞書	新聞	国語辞書	新聞	国語辞書	新聞	国語辞書	新聞
名詞	1,045	1,054	88.1%	89.9%	954	958	91.8%	91.1%
動詞	112	89	9.4%	7.6%	74	72	7.1%	6.8%
形容動詞	28	19	2.4%	1.6%	−	−	−	−
形容詞	0	3	0.0%	0.3%	11	21	1.1%	2.0%
副詞	0	7	0.0%	0.6%	0	0	0.0%	0.0%
感動詞	1	0	0.1%	0.0%	0	1	0.0%	0.1%
延べ合計	1,186	1,172	100.0%	100.0%	1,039	1,052	100.0%	100.0%

5. おわりに

本研究では日本語と韓国語における外来語を考察対象とし、新聞における実際の使用傾向及び品詞の派生関係から両言語の生産性について考察を行った。その結果、以下のことが明らかになった。第一に、辞書での外来語の数は日本語が非常に多かったが、新聞における日韓の共通の外来語の出現頻度には大きな差がないことが確認できた。第二に、日本語は多様な外来語を幅広い範囲で使用されるが、韓国語では特定の外来語に偏りがあることが分かった。第三に、日本語は韓国語より名詞から動詞派生による生産性が高いが、韓国語では名詞の形容詞化による生産性が高い傾向が観察された。最後に、このような手法を通して他のジャンルにて、実生活上における外来語の使用実態を把握や、外来語以外の言葉における生産性について考察していくことを今後の課題として挙げておきたい。

【参考文献】

石綿敏雄(2001)『外来語の総合的研究』東京堂出版
沖森卓也・木村義之・田中牧郎・陳力衛・前田直子(2011)『図解日本語の語彙』三省堂
北澤尚(2012)「現代日本語における外来語の品詞性について」『学芸国語国文学』44、pp.1－13
北原保雄(2001)『明鏡国語辞典』大修館書店
金愛蘭(2012)「外来語の基本語化」『外来語研究の新展開』おうふう、pp.29-45
国立国語研究所編(2006)『新「ことば」シリーズ19 外来語と現代社会』国立印刷局
田中牧郎(2006)「現代社会における外来語の実態」『新「ことば」シリーズ19 外来語と現代社会』国立印刷局、pp.38-46
김세중(1998)「외래어의 개념과 변천사」『새국어생활』8-2、pp.5-19
노명희(2012)「외래어 차용의 형태론적 양상」『반교어문학회』33、pp.35-68
연세대학교 언어정보개발연구원(1998)『연세한국어사전』두산동아
임지룡(2002)「현대 국어 어휘의 사용 실태와 조어론적 특성」『배달말』30、pp.41-67